

春燈

1 月号

January 2010



主宰の句

安立公彦

蝮蛄鳴くや敦をしのぶ京の宿

胡桃割る旅にしあれば愁ひなく

木がらしの肩組み走る京の街

どの道を行くもしぐれの銀閣寺

一方に灯ともる京の寒さかな



燈下集



○ 深川敏子

秋場所の終りし橋を渡りけり
小名木川塩なめ地蔵小鳥来る
くるくると木場の角乗り天高し
千社札べたべた貼られ走り蕎麦
今日は過去日記閉づれば木の実降る

○ 和田幸江

黄落や日照雨の過ぐる鬼瓦
行く秋の風受く白きベンチかな
芋の露星しづくして信濃みち
台風の目の中にて豆を煮る
子の遠し目路のかぎりの赤とんぼ

○ 大室恵美子

分水嶺紅葉の彩を違へけり
隠沼の隠りを破る鴟の声
旅に買ふ名所の切手翁の忌
十六夜の一句自づと浮かびけり
語尾濁すことも世過ぎやそぞろ寒

○ 卯木堯子

われからや胸に迫り来アラブの音
仏手柑はるかに山河越え来り
秋の旅はるか電話の遠野より
行く秋の雲せめぎ合ふ川の面
小鳥来るふつくら仕上げ炒卵

○ 小宮 淳子

入相の鐘のせかせる野分空
天空の棚田ふちどる彼岸花
千手観音千の秋風作りけり
鱚雲神の指紋のみえかくれ
桐一葉落ちて淮南子ひもどきぬ

○ 尾野 奈津子

西海の大き落暉やはぐれ雁
草の花群れて寂寞こぼしけり
長き夜や論語素読の返り点
鳴く虫の姿は知らずただ聞けり
赤べこは頷くばかり夜長飽く

○ 寺村 年明

初鴨にはやくもハレムらしきもの
あぢさゐのすがれにやさし夕日かな
いつまでも捨てられぬ文十三夜
流水を置き去りにして秋出水
見目よくて棄つるに惜しき捨案山子

○ 小嶋 恵美

居待月むかしのうたを唄ひけり
折鶴を添へて智恵子の檸檬かな
猿人と繋がる糸や栗拾ふ
自らに倦みてたたくや鉦叩
星月夜舫ひて主亡き舟も

○ 三宅 文子

こんなにもひとつの言葉待つ夜長
星月夜背ナに字を書く指の先
女より男の淋し鱚雲
面打の眼見据うる無月かな
夫恋の「井筒」の中より秋の声

○ 太田 慶子

ひとつは夫のひとつは吾の秋ともし
見送つてくる子満月指差せり
面打の面打つ音や月の空
草の穂や口を尖らす山頭火
天高し師の句碑に師の声満つる

○ 藤原繁子

塔頭を辞せば花街の秋すだれ

おはひりやすの声につられてとろろ汁

身に入むや京に幽霊子育館

亀の子束子なんぞを買ひて暮の秋

新小豆ほろりと煮えて逢魔が刻

○ 佐橋敏子

考ふる葦とよ後の更衣

素性よき芒は花舗に売られけり

穂絮とぶ人それぞれに影ひとつ

簪は古渡り珊瑚後の月

未枯の道ひと筋の先に駅

○ 中島節子

霧深しわが声我に纏はり来

水澄みて映るものみな澄めりけり

長江をゆく夢久し颯雲

木瓜の実のいびつも風情盆の上

鈴の鳴るぼつくり嬉し七五三

○ 橋本リエ

柊の花にも触れて朝の試歩

なかなか手操るに難し烏瓜

一輪づつはなれて散つて冬ざくら

秋夕焼バックミラーに吸はれけり

お会式太鼓九十五年の音の冴ゆ

○ 青柳雅子

木犀や父手作りの蔵書印

円周率復権なりて望の月

月見草女人齢をかくしけり

残る蚊の何としてでも刺すつもり

年波の寄する速さや初時雨

○ 木多芙美子

たたなづく山や霧立ち霧流れ

からから鳴る飛びそこなひの蓮の実

猫往きて遺る爪あと露けしや

はんなりと釣瓶落しに街沈む

黄檗山出くづしの黄葉かな

○ 西山浅彦

親方の年忌昨日に松手入
潮の目のはるかに光る花野かな
柿たわわ柿泥棒を待てど待てど
行く秋の座敷わらしの所在かな
地の果の神よぶ祈り火の恋し

○ 小張志げ

運動会騎馬戦大将女の子
普段着を華やかにする赤い羽根
論駁の正鶴を射る鴟高音
ちちろ鳴く万年筆の持重り
豆本の妖怪図絵や茶立虫

○ 江草礼

時代祭徒士に重たき火縄銃
勤皇隊列歩み揃ふや罽雲
結び上げし児の髪に舞ふ木の葉かな
はんなりと意地を通すや雁の空
光背に千の仏や秋闌けて

○ 見田英子

朝露をまとうて金の成る木かな
残る虫生くる証を紡ぎけり
日の匂ひこもりて美しき紅葉山
紅葉のお寺でジャズを聴きにけり
辛き日も佳き日もありて菊日和

○ 長谷川友子

いなびかり膝に今昔物語
十月の窓に切り取る日本海
秋日差す木組み斜めのレストラン
早鐘打つ胸を残して野分過ぐ
夜長の灯消すやシャガール壁に消ゆ

○ 白杵游児

からすみに母なる海を想ひけり
堂島に残る米蔵十三夜
一仕事終へし魔女かも夜這星
新走りのその名は「翁」伊賀の旅
炉を開く横座は若き当主かな

当月集

安立 公彦選



○ 瀬戸峰子

いづかたへ神の手遊び草の絮

草の絮靡きては風去なしけり

風に乗り或いは逸れ草の絮

鳥渡る真青の空を眩しめり

一天の綻びなきを鳥渡る

○ 北岸邸子

佇めばひとも佇む破蓮

清水の舞台かなめや京の秋

醍醐寺のもみぢ一葉私す

着ぶくれて優先座席賜れり

束の間の安らぎありぬ落葉時

○ 今井弘雄

自販機の硬貨の音や秋の暮

菊日和見返り阿弥陀慈愛の目

高瀬川水面にこぼる秋ともし

しぐるるや足元暗き幻住庵

駅に向かふ朝の人波冬に入る

○ 竹内慶子

老い猫の遠目してをり野分あと

穂すすきの輝き残し大河暮る

真夜に聴くナツキンコール秋深し

大桶に抱かれてみたき小春かな (関西大套二句)

京めぐり焼栗口にはふり込み

○ 片山博介

露の玉一大伽藍宿しけり

落飾の女人の棲みし花野かな

魚鼓一敲洛北の秋深めけり

墓碑銘に脱藩の文字鳥渡る

尊王も佐幕も土に草の花

春燈の句

安立 公彦選



残菊や角の欠けたる巴塚

東京 清水 美子

切絵めく京の街並十三夜

綿虫の鐘楼の辺に消えにけり
開拓史刻む碑鮭上る

埼玉 大文字孝一

炭つぐや京の町屋のおばんざい

懸崖の菊一輪づつのいのちかな
袴穿くことにも慣れて菊日和

観音の瓔珞揺るるしぐれかな

缶切のいらぬ缶詰文化の日

東京 渡辺 若菜

高館の日矢浴ぶ釣瓶落しかな

稲の香や辻の石仏苔衣

山の端に無垢の夕日や鳥凧

厄除の鐘ひとつ撞く菊日和

東京 渡辺 若菜

休耕田増えて雀は蛤に

水煙の天女抜け出す良夜かな

（薬師寺）

聞きなしや糸刺せ針刺せつづれさせ

秋風や母の踵の柔らかき

埼玉 市川 玲子

虫の音を相聞の譜と聞く夜かな

立冬の空おだやかに明けゆけり

埼玉 市川 玲子

猫日和深秋の窓広く開け

掌に抱き加減はかるや温め酒

埼玉 市川 玲子

風化してゆく懐しき日々星流る

すがりつく冬の蚊あへて叩くまじ

埼玉 市川 玲子

何思ひ生きるか若き冬の蠅

駅前交番ともし火色に柿垂れて

埼玉 市川 玲子

山茶花の花美しや早雲寺

朝寒や夕爾の句碑に射すうす日

広島 藤村 達江

宗祇句碑桜紅葉のなかにあり

紅葉且つ散るや鱒二の文学碑

広島 藤村 達江

枯山水池のほとりに石路の花

紅葉且つ散るや鱒二の文学碑

広島 藤村 達江

余言

安立公彦

寒鴉と同じ夕映え見てをりぬ

長谷川照子

歳時記の「寒鴉」の解説を見ると、大方は「荒涼」「侘しき」を前面に出している。そうした中で、虚子編新歳時記のみは、「……さうした鴉が寒中の荒涼たる天地の中に、点々して人に近づいて来ると、人も又自らこれに親しみを覚えるのである……」と記す。

この句を見て感じるほのかな安らぎの思いは、まさにこの「人も又自らこれに親しみを覚える」と同じである。同時にこの句には、ユーモアの情感も詠みとれる。

東山三十六峰わかたぬ秋の時雨かな

渡辺 鶴来

南禅寺三門の高い階段を登り回廊に出ると雨が降り出し

た。東山は烟るような峰々を連ねている。立冬前の、名残りの秋しぐれに泛ぶ山容は、旅人の眼に飽きることのない姿を見せていた。

「石川五右衛門が、絶景かな、と叫ぶ歌舞伎のシーンは脚色されたものらしいです」。案内してくださったHさんが時雨を見ながら語り始める。

関西大会では作者とは別行動だったが、この句に見る秋しぐれの景は良く分る。同類の句は多かった。しかしこの「東山三十六峰わかたぬ」には、作者の一句に籠める気迫と、表現の緊密さが詠みとれる。

同時発表の、〈秋刈つて心のすきま拵げけり〉の句もみごとだ。「心のすきま拵げけり」に思いの深さを見る絶唱ともいべき句である。

晩菊の匂ふや師の匂ありありと

西川 保子

関西大会は内容のあるいい句会だった。西川保子さんを中心に、松本峰春さん、和田孝村さんの許、担当の皆さん方のご尽力に、この欄をお借りして厚くお礼申しあげます。

この句の「師の匂」は、安住敦の、〈晩菊は地に伏し易し起しけり〉。昭和四十五年作、敦の第五句集『午前午後』に載っている。この昭和四十五年は、また春燈関西大会の始まった年であり、同時に敦の句に牡丹の大作が出現する年でもある。そういう中で敦のこの晩菊の句は、いかにも

敦らしい句である。

敦の句は作者にとつても忘れられない句なのであろう。それは「ありありと」にみごとに表現されている。そしてその思いに、「晩菊」がひっそりと寄り添っている。

倦かず見る色のくさぐさ秋の虹

呉 文宗

知恩院前から乗った車は、折からの混雑に遇い、遅々として進まない。四條通りに差し掛ったとき、虹だ、同乗のKさんが言う。時雨の上がった空に大きな虹が懸かっていた。久しぶりに見る虹だった。京都は虹の色まで鮮やかだ。そう思ったあとで、今さら旅愁でもないと思つた。

しかし美しい虹だった。虹は大気中の水滴に日の光が当たって出来るもの。とすると緯度の異なる台湾と日本とでは虹の色にも違いが出るのか、などと詰らぬことを思う。

俳句は対象を理詰めで考えるのではない。感情の林に分け入って詠うもの。そこからこの句に見る、「色のくさぐさ」という一句にふさわしい言葉も生まれるのだ。

草の絮靡きては風去なしけり

瀬戸 峰子

「草の絮」はいわゆる穂草。その穂草が吹く風に逆らわず靡く。しかしはた目には靡いているように見えても、実際は穂草が風を去なしているのだ。

こういう句には若干の訓戒も感じられよう。しかしあく

までもこの句は写生句である。それは、へ風に乗り或いは逸れ草の絮の句も同じである。

哲学の道に思案の時雨かな

河本由紀子

銀閣寺を出て、降りつる道を南禅寺に向かう。道は疎水に沿い、板石を敷きつめてある。「この疎水は北を指して流れています」。案内のHさんが縷々説明してくれる。

西田幾多郎が散策したことから、この全長約二キロの小径には「哲学の道」という尊称が冠せられている。折しも京の時雨。思索には申し分ない。はるか以前読んだ『善の研究』を思い返すが、きれいさっぱりと忘れていた。

作者の「思案」とは何か。それは句を見る人それぞれの胸中にあるもの。それを作者は、「思案の時雨かな」と流す。達意の句である。

笑栗や土偶の女体豊かなる

藤原 若菜

この「土偶」は縄文土偶と呼ばれるもの。一見忘れ難い印象を与える。またその土偶の女性神の頭部には、蛇の造形が巻かれてある。この蛇信仰は縄文中期の祭祀土器に満ち溢れ、大和三輪山の神も蛇神である、という本を読んだことがあった。

そういう考察は措いてこの句の「土偶の女体豊かなる」は充分に納得出来る。「笑栗」の季語もふさわしい。